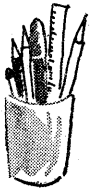
私の保育

堤　真紀子



一、はじめに

潮風の中で、まるで鮮魚のようにピチピチ育った子どもたちを連れ、威勢のよい声が親から、また祖父母から私に伝わります。

「先生、私とこの子頼みますわな」

「おっちゃくいで先生えらいと思うけど、まあみとうくんな」

「先生様、よろしくお願いします」

幼児の家庭が漁業であり、その内のほとんどが大阪へ魚商（ブローカー）に出かけるといった松阪地区でも特殊な職業を持つ家庭の多い、小学校併設の港幼稚園へ、昨年の春私は独立園から転勤になりました。昨年の九月から三年保育が実施され、私はその年長組三十五名を担任することになりました。

二、漁業の町の幼児と

初めての出会いを私はひとりひとりの幼児を抱いてあげることから始めました。「H君は元気そうな顔色ね。いつも外で遊ぶからかな」「M子ちゃんは、ニコニコしているのね。何かうれしいことがあるのかな」「A君は、ずいぶん重いね」等と話をしながらひとりひとりの幼児を抱きあげていきました。初めて出会った私に、幼児は全くてれることもなく、また恥ずかしがらずに次から次へと抱かれてくるのです。『漁場の子どもたちは人なつっこいのかしら』そう思いながら、ひとりひとりの幼児の顔を見詰めていくと、驚いたことに、多くの幼児の顔があまり清潔とは言えないのです。

「K君は、朝、顔を洗ってくるの？」「洗わへん」と恥ずかしそうな返事。「Y君はどう？」「洗わへん」私は、困った顔をし、「ハンサムな顔がだいなしやね」と言いながら、K君のタオルを濡らしてふいてあげることにしました。Y男は、「ぼく、今から洗ってくるな」と手洗いの方へかけて行きました。幼児たちに洗顔の習慣はついてないらしいようす。きっと歯磨きもできてない

のではと思い、歯が痛そうな顔をしているA子に「Aちゃんは、ご飯を食べた後、歯を磨いてくるの？」と尋ねてみました。「うちは、歯を磨くもんないんや」「あら、困ったね。Aちゃんはお小遣いもらうでしょ。そのお小遣いをためて買ったらどうかな。歯を磨くこと、大切なことだものね」そう言いながら私はさっそくA子の連絡ノートへ「歯が痛いと言っている幼児が多くいます。Aちゃんも時々痛そうにしています。もし時間がありましたら、歯科医へ連れていってあげて下さい。それからもう一つお願いしたいことがありますの。歯を磨く用具がないと聞きましたが、虫歯をなくす予防にもなりますので、できればおうちで用意していただきたいと思います。幼稚園でも今、園で使用する歯磨きを準備しているところです」と書いて、A子に「今日、おうちへ帰ったら、お母さんに見せておいてね」とノートを渡し、返事を待ちました。翌日、A子にさっそく、「お母さんお手紙みてくれた？」と尋ねてみたのです。「わたしは知らん、お母ちゃん夜遅いもん」という返事。他の幼児の連絡ノートにも返事が書いてなかったり、また、〝見ました〟という印がしてないのです。朝の四時、五時ごろから起き、貝を売りにでかける親、また大阪へ魚を売りに出かける親たち。夜は夜で、魚が売れるまで帰宅しないため、幼児が床についたころ、帰ってくる親が多く、これでは、いくら連絡ノートへ手紙を書いても両親たちは仕事の疲れで、ノートに目をとおす時間もないのだろうと思い、私は園へ送り迎えに来てくれる祖父母に話をすることにしたのです。

「連絡ノートにも書いたんですが、Aちゃんに歯磨きの用具をAちゃんの小遣いで買っていただけませんか」とおばあさんに話しをしたところ、「先生、すみませんな。嫁が働きに行っとるもんで、この子はほったらかしでな。私も年をとっとるもんで、幼稚園のことはわからんし。小遣いだけは、この子が不自由せんだけおいてありますで、さっそく買いますわ」そう言って帰って行きました。翌日、A子は「先生、歯を磨くもの二つ買ってもろたに。そいで私、歯磨いてきたよ。これみて、きれいになったやろ」と得意げに私に話してくれました。「きれいな歯になったね。ちょっと鏡を見てこようか」といって鏡のところへA子を連れて行きながら、A子の祖母は、ハブラシを二本も買ってA子に与えたということを私はどう考えればいいのかしら、ただ単に、余分に買ったのだろうと思えばすむことなのでしょうが、私には何だかこのことが気になったのです。

三、親の気持ちを知ってから

園でいるものであれば、それがお金で買ってすむことであるな

ら、必要以上に多く買うといったこの祖母の気持ちの中には、きっと、お金を用意すれば、教育はなされていくのであろうと、思ったのではないでしょうか。家庭教育にしろ、どのように子どもをしつけ育てていけば立派な人間になっていってくれるのだろうか。祖父母、親たちは、漁師町の中で子どものころから働き続け、教育よりお金儲けのほうが大切であるといった考えで育てられてきたのです。近海漁業で生計をたててきた親たちは、ただ働くことだけが唯一の生活であったのです。

現在、海岸地帯に工場が建ちならび、汚染された海では、魚もとれなくなり、海での仕事ができなくなってきつつある今、漁業だけではやっていけない。小、中学校だけの学力では、これからは充分といえないのではないか。外へ働きに行くにはやっぱり学歴が大切なんだという経済変動とともに親の教育に対する考えも変わってきたのです。しかし、だからどうしたらいいのだろうか、子どもを立派に育てるには、やっぱりお金がいる。お金さえ出したらあとは学校に任せればいいじゃないか。私らは、教育のことはわからんのやで、と言って親は働きに出るのです。

このように、大阪近辺へ魚商に出る多くの家庭では、子どもを生後百日目から祖母に預けたり、叔母に世話をしてもらったりしているのです。子どもたちは充分両親の愛情に浸ることもなく育ってきているのではないでしょうか。

かわいい小さな手の爪が長くのび、家では切ってもらってないのでしょう。大阪で買ってきてもらった流行の先端をいくような洋服を着ているにもかかわらず、爪は長くのび、その爪にマニキュアを塗っている幼児。私は日向で、ひとりひとりの幼児の爪を切りながら、この幼児たちに清潔な快い気持ちを知らせてあげることの大切さを感じました。「お母さんに切ってきてもらって」ということは、この幼稚園では通用しないのです。

四、保育者として私の努力したこと

私はこの幼児たちをひとりひとりひざの上にのせ、くしで髪の毛をとかし、爪を切り、スモックのはずれているボタンを糸でとめながら、この幼児たちに少しでもお母さんのかわりになってあげよう、そして、家庭的なふん囲気のあるクラスにしたいと努力しました。でも反面、二年保育を担任し、このように家庭的ふん囲気ばかりで保育がなりたっていくのかしら？　それにプラスやはり年長組五歳児としての発達にあった教育をしなければならないのではないか。そう考えながらも、現場へ出て四年目の私としては二年保育年長をはじめて担任したのですが、一年間の教育過程が全くつかめず、いったいどうすればいいのかしらと悩みの多

い毎日が続きました。幼児たちも、家庭に帰れば昼間父母はいず、一日平均三〇〇円位、多い子どもでは五〇〇円の小遣いが遊んでくれるといった状態の中で、園へ何かを求め、期待してやってくるのです。でも、幼稚園は家より楽しいはずであるのに、私の環境設定のまずさからか、幼児たちは、何をするにも遊びが長続きせず、廊下をむやみに走りまわったり、水道の水を友だちにひっかけて喜ぶ幼児が多く、なかなか幼児自身から遊びをつくりだしていくことがないといった状態で、毎日どうしたらいいものか困ってしまいました。

このような中で、絵本を読んでもらうことを大変好み、「お仕事をしたいからお部屋へ入って来て」と言ってもなかなか入ってこない幼児たちでも、絵本をひらきだすと、われ先にと、私のそばへ集まってきます。その時の幼児の目はランランと輝き、とってもすばらしい顔つきになります。私はそのような時、絵本の中でも、物語的な絵本ばかりにかたよらず、やっぱりしつけに関したストーリーの内容を選んだりし、少しでも幼児の生活の中で身についてくれるものの多いことを願うのです。

おもちゃは、ふんだんに与えられ、壊したらすぐ買ってもらえる。なくしたら、さがさなくてもすぐ新しいのが買ってもらえるといった家庭の中で、親は、わずかな休みの日はおもちゃを買いに、少し離れた市街地へ連れて行く、また仕事の帰りに新しい服を買ってきたりして、すぐに愛情をお金でかえてしまうようにみうけられ、親はどのように愛情を表現すればいいのかわからないでいるのではないかと思います。

多くの家庭にある親子一緒に入浴して過ごす子どもにとって楽しい時間も、漁業という連帯感が必要な職業柄、公衆浴場があって、大人同士の社交場となり、親子の触れあいを持つことが生活の中で少ないのです。そこで少しでも親子の触れあいを多く持ってほしいと考え、土・日曜日の休みを利用し、絵本の貸出しを始めました。幼児たちは、絵本の貸し出し日を毎日楽しみに待ち園へやって来るのです。毎日貸してあげたいとは思いながらも、親のいない時は読んでもらえないだろうし、また仕事の忙しさから「自分で読んどきな」と言われるにちがいないだろうと、週一回だけ貸し出しをしてみました。幼稚園では初めて絵本と出会った幼児たち、その絵本には幼児たちの求めている何かがあったのではないでしょうか。親に読んでもらえるといった中で、親が自分のために時間をつくってくれることが幼児にとって何よりもすばらしいものであったのではないでしょうか。稼いだお金で立派な家を建ててもらっても、「汚すから外で遊んどいな」と言われる幼児。そこには、全く幼児の生活はないと言いたいのです。

五、わかってきた幼児たち

こうして少しずつ幼児の生活にある問題がわかりかけてきた私は、もっと幼稚園で安定して遊んでほしい、家庭でできないことを充分経験してほしいと思いました。「先生、遊んで」「先生のそばが好き」と教師のそばにいることだけで満足している幼児、また、反対に、いくら私のそばへ呼びとめようとしてもすぐ外へ出ていって、固定遊具で次から次へと遊びをかえていったり、犬ころのように走りまわって、その中では、身体にあたったとか遊具をとりあう〝けんか〟がくりかえされるだけだったのです。このような幼児たちに対し、何とか安定した活動が続き、幼児らしい人間関係が生まれるようなクラスにしたいと思案の末、先輩の先生に相談にのっていただき、保育室の出入口を一つにしてみました。

出入口のうしろをしめ、前から出入りをすることにしたのです。最初は「うしろの戸、あかん」という幼児もいたのですが、「これからは、先生のいるそばの戸から出入りしてね」と約束し、クラス全体でまとまった活動をする時は幼児が勝手に外へ出て行くことを禁じてみました。教師が出入口のそばにいるせいか、幼児たちが部屋へ出入りするのが静かになり、やがて部屋の中の騒がしさも少しずつ少なくなってきました。運動会が過ぎたころには、外へ出て行く時、教師と目と目があえば幼児はニッコリ笑って出て行くことができるようになり、部屋の中は窮屈だ、外へはやく出て行きたいというような気持ちで、まるで逃げだしていくような幼児もなくなっていきました。何だか落ち着いて、スムーズにクラスへの出入ができるようになったのです。それまでは、朝教師と顔をあわせてからあと、いつの間に出ていってしまったのかしら、どこで遊んでいるのかしら、といった幼児もいたのですが、そのようなこともなくなったのです。このことはただ単に、出入口を一つにしたという教師の試みが原因であると言いきるのは早計で、教師を中心にしたクラスの人間関係が育ったのではないかと先輩の先生は言われたのですが、私としては、自分が試みにやったことが成功したことを、うれしく思いました。

六、幼児の喜んだこと

このようにかわってきたクラスのふん囲気の中で、私は幼児たちにドッヂボールをしない？　とさそいました。活動的な遊びが好き、特に走ることが大好きな幼児たち。運動会の行進はうまくできなくても、かけ足になると、とってもきれいにみんながそろってできるんです。テレビ等から生活に音楽はあっても、それはす

べて幼児のリズムではないためか、音楽にあわせて歩くのはきらいました。「歩きたくない」といっても、かけ足の曲を聞くととびあがって走りだすのです。こんな幼児たちですから、ドッヂボールと聞いて大喜び、男、女にわかれて始めたのです。「先生は、女の子の組にはいんな」と男児の元気のよい声、絵本を読んでもらっている時と同じ位、皆いきいきとしているんです。

「ボールがあたったら外へ出るのよ。ボールはなるべくお友だちの足へあてようね」とあそびの約束を決め、始めました。

今まで、まるで目的のないような遊びをしていたような幼児たちとは全く違い、魚がピチピチはねているようです。今の幼児たちの発達にあった遊びなのかもしれませんが、でもそれ以上に私は、保育室の出入口を一つにしたことで幼児たちのクラス意識が高まり、友だちとの気持ちの通じあいができたからじゃないかしらと思いたいのです。安定した気持ちで遊ぶことができたのではないでしょうか。「女の子は先生ばっかりにくっついているので、あてられやんわ、もっと離れなさ」と男児の声、私はうれしくて幼児と一緒になって遊んだのです。

このほかに、幼児たちの喜ぶものに給食があります。毎日、給食を楽しみに幼稚園へやって来る幼児。一学期は一日おきに、二学期からは毎日給食をしています。「今日は給食あるの？」朝、教師と顔をあわせるとまず第一声が給食のことなのです。「今日はプリンがあるんやて兄ちゃん言っとったわ」小学生の兄に給食の献立を読んでもらって園へやって来たK也。朝早く親が働きにでかけるため、兄にラーメンを作ってもらい、登園してきたのです。だから給食が大好きでたまらないのです。トイレへ行って手を洗い忘れることのあるKちゃんも、給食の時は忘れずに石けんで手を洗うのです。「食事の前には手を洗おうね。」「すんだあとは必ず歯をみがいてね」という約束だけはどの幼児も実行してくれるのです。家庭でしてほしいしつけを園が代って指導しているのです。給食のエプロンを私がすると、どの幼児も「お母ちゃん、お母ちゃん」と、しがみついてくるのです。

鮮度の新しい魚を市場に出さねばならない両親たちが仕事に早く出るため、朝からうどん、ラーメンという食事らしい食事をしてこない幼児には、お昼の給食がまちどおしいのです。

現在、給食について、冷凍食品をつかうからまずいとか、給食は何のためにするのか、家庭の味がないなど多くの問題が出されていますが、この幼児たちをみていると、そのような問題は消えてしまうのです。はやくおかわりがほしくて、おかずをかきこむ幼児、お皿をペロッとねぶっている幼児、この満足げな表情で食べている幼児をみると、食事のエチケットとして禁止しなければ

ならない言葉も消えて、ただ「はずかしいわよ」と言うことだけで精一杯なのです。

このように幼稚園では一番満足な時間である食事の時は、幼児たちは普段より話題が豊富になってきます。気分が落ち着き安定するのでしょう。「口にたくさんものをいれてはお話しないでね」とだけ言って私はこの幼児たちの話を一生懸命聞きました。ここでは幼児たちは自分を思いきり出してくれるのです。「ホルモンが大好きやわ」とか「チーズは食べたことないできらいや」母ちゃん、今、病気で休んどるんやんな、そやけど今日は迎えに来るて言っとったわ」等々。幼児たちの口からいろんなことがポンポンととびだすのです。給食の手伝いが大好きな幼児たち。「明日はぼくの番や」「机をふくよ」次から次へと給食の配膳、片付けを手伝ってくれる幼児、家庭では自分の仕事の役割りなどないのでしょうか、幼稚園でのお手伝いがしたくてたまらないのです。私はいつもお手伝いの人にお礼をいうのですが「どういたしまして」というおもいがけない返事が心よくかえってきて驚いたこともありました。

このように幼児たちは、親たちと共に過ごす時間が皆無といっていいほどですが、精一杯すくすくと育っていっています。私は幼児たちがこのような環境の中で、たくましく育っていってほしいと願いながら、幼児とともに、失敗をくりかえし、くりかえし、一年間を過ごしてきました。せめても基本的な生活習慣だけでも身につけてくれるよう努力してきました。時には幼児たちに裏切られながらも、私は幼児と一緒になってやって来たつもりです。今、一年生に送った幼児たちをみると私はうれしくて、なぜか「ありがとう」と言いたくなる思いでいっぱいです。

七、おわりに

私は今まで漁場の子だから「荒っぽい」「どもならん（乱暴）」という言葉を当然のように思っておりましたが、一年間がすぎた今、どの幼児もみんな同じだと言えるようになりました。ただいたいのは、教師は自分の持っている保育内容を幼児の生活に送りこんで、それができるか、できないか、喜ばないかどうか、ということでみてはいけないということが、一年たった今、少しわかったように思うのです。このことを私は常に頭におき、これからも、保育にあたっていきたいと思います。

（松阪市立港幼稚園）